

ハンク・モーガンが抱える破滅と忘却の宿命 : A Connecticut Yankee in King Arthur ' s Courtの結末についての一考察

著者	平田 美千子
雑誌名	英米文学
巻	63
ページ	21-36
発行年	2019-03-10
URL	http://hdl.handle.net/10236/00027768

ハンク・モーガンが抱える 破滅と忘却の宿命

—*A Connecticut Yankee in King Arthur's Court*
の結末についての一考察—

平 田 美千子

Synopsis: Critics have discussed the ambiguity of the personality and behavior of Hank Morgan. Though he is a diligent democrat and has ample knowledge of science and technology, he is also arrogant and aggressive, and a seeker of power and esteem. Hank, in fact, has a vicious aspect in his character. In the last part of the story, he chooses to drive 25,000 knights to their death to protect himself and his 53 followers. After the catastrophe, Hank's old enemy, magician Merlin makes him sleep for 1,300 years under a spell. Then he awakes in the late 19th century and dies alone in obscurity. Why does this novel have to end with Hank's ruin and oblivion? This paper will discuss how Twain depicts the contradictory character, Hank. It also considers how such a personality leads to the grotesque ending of the novel and what meaning readers can find from it.

はじめに

A Connecticut Yankee in King Arthur's Court (1889) の主人公にして語り手のハンク・モーガンの矛盾した人格と行動については、これまで多くの批評家が議論を続けてきた¹。ハンクは、生まれによって社会的地位が決定されることがない社会や民意による政治を当然と考える民主主義的な思想を持ち、プロテスタンティズム精神に基づく勤勉さと科学技術の知識を備えており、アメリカ人としての美德と誇りを体現しているようにも見える。一方でハンクは、周囲の人間を統べる快感をあげすけに語る権力欲、行き過ぎた自己肯定感から来る傲慢さ、人より優れた自己を社会に顕示し、常に自分の優位性を確認したいという承認欲、過剰な自己防御の裏返しとして見せる冷

酷なまでの攻撃性を備えており、小説の中で異様な不気味さを覗かせている。このような不徳な性質は、この作品の四年前に出版された *The Adventures of Huckleberry Finn* (1885) の主人公ハックの素朴で無欲な性格とはかけ離れている。ハックはジムを助けて「地獄へ行く」決心をするが、ハンクはというと、我が身と自分を崇拜する少数の部下の保身を優先し、二万五千人も騎士を死に追いやるという「地獄」の道を選ぶ。このような凄惨な結末を招くハンクの人間性には違和感を覚えずにいられない。

テクノロジーと民主主義を体現する近代的な人物ハンクが、六世紀のイングランドに入りこみ活躍するのは理に適っている。十三世紀も後の時代に生まれた主人公が、六世紀当時の人間には到底思いつくことができないような方法で困難や問題に対処する場面は作品の山場である。ハンクの成り上がってゆく様が痛快な物語の前半を読む限りでは、ハンクの悲惨きわまる結末を予測することは難しい。物語の終盤にハンクは、おびたしい数の騎士の屍が発する異臭に包まれ身動きが取れなくなる。そこに変装したマーリンが姿を現わし、ハンクに千三百年間続く眠りの魔術をかける。語り手「トウエイン」による「あとがき」“Final P. S. by M. T.” (*A Connecticut Yankee* 572；以降 *CY* と略記する)において、眠りから覚めたハンクが世に名を遺すことなく孤独な死を迎える様子が語られる。

それにしてもこの作品の結末は、なぜハンクの身の破滅とその存在の忘却で終わらなければならなかったのだろうか。本稿では、トウエインが意識的あるいは無意識的に感じ取っていた時代の趨勢と、当時はまだ新興国だったアメリカが抱えていた危うさ、そして、時間旅行という SF 的²テーマを扱った初期の小説のひとつと見られている *A Connecticut Yankee* における (Clute 1247；中垣 308；小谷 41) 現在から過去へタイムトリップするという物語設定、という三つの観点から、この作品に描かれたハンク・モーガンの人物像と彼が招いた物語の結末について考えてみたい。

I. テクノロジーによる改革の限界 —ダイナマイトと電流鉄条網と機関銃

ハンクは、第八章において、自分は時代のギャップがあってこそ偉大な人物として活躍できる、と語っている（CY 95-96）。なるほど自分の生きている時代から千三百年も遡れば、昔の人間にすれば奇跡的あるいは天才的と見えるようなことをやってのけることはそう難しくはないはずである。ましてやハンクは、兵器工場に技術師として勤めていた人物である。一般的に軍需産業というのは、国家の最先端の技術が結集する場である。それはハンクの次のような言葉が物語っている。

私は大きな兵器工場に行って手に職をつけたんだ。兵器に関わるあらゆることを学んだから、なんでも作ることができるようになったよ。鉄砲、リボルバー、大砲、ボイラー、エンジン、人の手間を省くことにつながるありとあらゆる機械だ。人間が必要とするものならなんでも作ったものさ。この世のものならどんなものでもね。（CY 20）

ハンクは十九世紀当時の高度な科学技術に通じていたため、六世紀の人間の度肝を抜き、賞賛を恣にし、時の権力者に取り入ることができた。ハンクに最初のチャンスが訪れたのは、偶然発生日時を覚えていた日食を利用して、さも壮大な魔術を操るがごとく振る舞うことを思いついた時である。ハンクは「日食の日時を言い当てて大勝利を手中にし、全国民の驚きと尊敬の的になりたかった」（CY 72）と語る。その後も自らの知識と技術を活かす機会を逃さず六世紀のイングランドを支配する「ボス」に成り上がってゆく。その勢いのままついにハンクが思い描くような変化と革命をイングランドにもたらすことに成功するのかと思いきや、そうはならなかった。結局ハンクが選び辿り着いた結末は、大規模な破壊と殺戮だった。

なぜハンクは「なんでも作ることができる」技術を持っていながら、最終

的に凄惨な戦争を引き起こすに至ったのか。ここで、ハンクの人一倍強い権力に対する執着心に注目したい。ハンクはタイムトリップをして六世紀のイングランドに入りこんでほどなく、「もしいまが本当に六世紀なら、こんなうまい話はない、三ヶ月以内にこの国全土を支配する者になってやろう」(CY 36)と考える。権力欲の強い人間ほど手に入れた地位の維持にこだわり、それが脅かされるとなると過剰な反応を示し、わが意に反する者や異を唱える者を徹底的に潰しにかかるものである。ハンクは日食事件後に得た政治的権力を使って魔術師マーリンを捕らえて石塔に閉じこめる。そして、その石塔をこれ見よがしに爆破することによって、日食に続く第二の奇跡を見たがる国民の好奇心を満足させようと目論む。ハンクは捕らえたマーリンに次のように言う。「あんたは私から危害を加えられたわけでもないのに、私を火あぶりにしようとしたことがある。さらに、私の名声に傷をつけようと企んでいただろう。だから私は、天から火を呼び寄せ、あんたのいる塔をぶっ飛ばしてやるんだ。」(CY 89) これはあからさまな報復宣言である。きわめて私的な復讐心のために人の身柄を拘束し、その命を脅しの材料に用いて、拳句に自らの圧倒的優位を示すために科学技術を使おうとする。こうしたハンクの未熟とも言える人格は、以後彼が取り得る行為が社会に多大な惨禍をもたらす潜在的危険性をはらんでいることをすでに物語の初期の段階で予感させるのである。

トウェイン自身は、この作品を発表する前に出版した二つの著作、*Life on the Mississippi* (1883)と *The Adventures of Huckleberry Finn* において、自然に相對峙する科学文明という観点から、科学の急速な発展を手放しで喜ぶわけにはいかない、という見解をほのめかしている。前者において、十九世紀後半の科学技術のめざましい発展を象徴する鉄道に主要な輸送・交通手段としての地位を奪われ、衰退の一途をたどる蒸気船の運命に同情を寄せている (*Life on the Mississippi* 254-55; 569)。安全運航のために水面を照らす灯りが船上や川岸に常設されたり、事故の原因となる川底の沈み木が徹底的に除去されたおかげで水先案内が飛躍的に容易になったが、その代わり航行に伴う川べりの情緒が失われてしまったと恨み言を述べてい

る (*Life on the Mississippi* 299-301)。一方、後者の主人公ハックは、文明に背を向け自然の中に安住の地を求める自然児として描かれている。

さて、それに対してハンクは、科学に基づいた合理的思考と知識に絶対の信頼を置く、南北戦争後に急速に発展したアメリカという巨大な新興国の申し子である。そのハンクが六世紀のイングランドにもたらしたものは、ダイナマイトと電気が流れる鉄条網と機関銃を使って繰り広げられる破壊と殺戮だった。作者トウェインが *Life on the Mississippi* と *The Adventures of Huckleberry Finn* において感じ取っていた時代の風潮と母国の抱える危うさが、*A Connecticut Yankee* の中ではっきりとした形をとって現われたのだと考えることができるのではないだろうか。³

そうした惨憺たる結末は、ハンクの人格的な問題に加え、当時の米国社会におけるイデオロギーとしての科学への信奉と徹底した合理主義精神がもたらしたものであったのかもしれない。科学の進歩と合理主義思想への行き過ぎた傾倒が安易な防衛論に結びつき、その結果、ハンクの選択した行為はことごとく破壊をもたらすものになってしまった。物語が中盤に差しかけたとき、理不尽な状況を甘受するイングランド国民を前にして、ハンクは次のように言っている。「すべての革命は、成功させようと思ったら、たとえあとでどんな代償を払おうともまず流血から始めなければならない、というのが不変の原則なのだ。それが歴史から学べるところである。」(CY 242) 世の中に変化をもたらすためには民主的な手段では時間がかかりすぎてしまう。すみやかに社会を変えようとするなら、現実的には流血を辞さずに武力を行使する必要があるというのだ。

科学の知識や応用技術を備えたハンクが、六世紀のイングランドで長年暮らす間に、十九世紀の世界でまだ見られないような独創的な発明をするには至らなかった、というのはこの小説の興味深い点である。厳密に言えば、ハンクによる発明がまったくなかったわけではない。例えば第十章では、電線を保護する完全な絶縁体を発明した (CY 121)、と言っているし、第三十一章から三十四章にかけては、「ミラー・ガン」なるものを作り出している (CY 404)。しかし両者とも、あくまでちょっとしたアイデア製品であって、

広く一般に知られるレベルで歴史に名を残すほどの発明ではない。ハンクが中世イギリスにもたらしたものは、ほとんど千三百年後の近代において発明されたもののコピーである。しかも、新しいものを生み出して文明の発展に寄与するどころか、はるかに古い時代の社会や人間に知られるにはことさら配慮が必要なはずの、破壊や殺戮をもたらす暴力的な道具をほとんどためらいもなく製造し使用するのである。そうした物語の後半は、ユーモアあふれる調子で展開してゆく前半からは想像もつかない、なんとも不気味な、後味の悪い仕上がりとなっている。このことは、*A Connecticut Yankee* が科学の進歩と合理主義的な精神がもたらす未来を暗示する作品だと考える一つの証左となり得るのである。

II. 帝国主義的な改革の限界—宣教と石鹼と野球

十九世紀後半は大英帝国を筆頭に、欧州の列強による帝国主義が世界を席卷した時代である。*A Connecticut Yankee* が発表された一八八九年当時、アメリカは実質的にはまだ北米大陸から進出するような帝国主義政策に乗り出してはいなかったが、九年後にはキューバで米西戦争を起し、ハワイ併合、そしてその一年後には米比戦争に突入して植民地を獲得し、西欧諸国を中心としたパワーゲームの渦中に飛びこんでゆく。

トウェインはそうした近未来を予期していたのだろうか。*A Connecticut Yankee* の物語世界はまさに、十九世紀のアメリカ文明が六世紀のイングランドに次々と移植されてゆく過程を描いている。つまり、ハンクによって代表される近代アメリカが、中世イングランドを植民地化してゆくのである⁴。須藤彩子も指摘するように、「以前は英国の植民地にされていたアメリカが、いわば意趣返しのように英国に植民し、洗練されていない民を教化する」のだが、そうした発想は、「トウェインならではの、逆転のユーモア」(78)にほかならない。その意味で、*A Connecticut Yankee* は当時のアメリカにおいて拡がりつつあった帝国主義的な思想を映し出していると言えそうだ。

ハンクはアメリカの民主政治を誇りに思い、揺るぎない信頼を寄せてい

る。それは、以下の発言を読めば分かるだろう。

国民の知的水準が高かろうが低かろうが、能力の大半は、名もなき人びとや貧しい人びとからなる幅広い階層に負っているのだから、国の自治に必要な人材が不足するようなことはこれまでなかったはずだ。(中略) もっともうまく統治され、もっとも自由で、もっとも啓蒙された君主政体であっても、国民の自治によって営まれる政体には及ばないのである。(CY 320)

ハンクは自身の振る舞いが帝国主義的であるという認識はないまま、中世イギリスへの近代文明とアメリカ的価値観の導入を推し進める。衛生的な観点から石鹸や歯磨きの使用を広めようとしたり、日曜学校を開いてプロテスタント系キリスト教の布教を図ったり、決闘や武者修行のような野蛮な慣習に代わり、野球をスポーツとして取り入れる。そこには六世紀のイングランド人の文化や価値観を尊重しようという姿勢は見られない。当時の人びとの無知で粗野な一面を論い、自らの正義を疑うことはないのである。

ハンクはそうした姿勢で改革に取り組み、自らが主導する改革が順調に進んでいるものとばかり思っていた。ところが物語の最終段階になって、常々その権威による影響力の大きさを警戒してきた(CY 118, 120)ローマ・カトリック教会の掛け声を合図に、騎士たちを先頭にして、イングランド国民がこぞってハンクに対して反旗を翻す。ハンクは改革が上辺だけのもので、人びとの心根にまでは届いていなかったことを思い知らされるのである。

トウェインは *A Connecticut Yankee* の出版から十数年後に、アメリカが帝国主義の道を突き進むことに強い懸念を表明し、大義のない米比戦争を痛烈に批判した⁵。また、この小説を手がけるずっと以前、一八六六年に通信員として当時サンドイッチ諸島と呼ばれていたハワイを訪れたとき、欧米列強の利権がせめぎ合う現場を目の当たりにしている。その頃の著作では、帝国主義そのものの是非を問うようなことは書いていないが、現地における宣教活動や欧米的な価値観の押しつけについては、肯定的とは言いがたい、皮肉

のこもった姿勢を示している (*Mark Twain's Letters from Hawaii* 53, 71, 75, 210-11; *Roughing It* 477, 483-86)。そうした潜在的意識が *A Connecticut Yankee* を執筆していた当時間も働いていたとすれば、「ハンクの失敗の原因は(中略)アメリカの政治, 経済, 文化を強要して社会の頂点に立つという帝国主義的な覇権を目指したところにある」(筑後 66) という指摘, さらには「ハンクの破滅は, 帝国主義の論理とメカニズムの破滅であり, 帝国主義の破綻を暴露する」(須藤 82) という指摘はもっともらしく思われる。六世紀のイングランドにおける, 近代アメリカ文明によるハンクの早急な改革は, 失敗という帰結しかありえなかったのだろう。⁶

III. 現在から過去へのタイムトリップの宿命

—電信・電話と新聞報道

トウェインは, フランスの作家ジュール・ヴェルヌとともに SF の生みの親と称されるイギリスの作家 H. G. ウェルズが *The Time Machine* (1895) を発表するよりも六年早く, *A Connecticut Yankee* を世に送り出したことになるが, タイムトラベルをテーマとした両作品の根本的な違いは, 移動する時間軸の方向が正反対であることだ。*A Connecticut Yankee* では主人公が現在から過去へ移動するのに対して, *The Time Machine* では主人公は現在から未来への時間旅行を体験する。

物語をどう展開するかを構想するとき, 現在から未来へのタイムトリップの設定を用いる場合と比べると, 現在から過去への設定が採用された作品においてその創作上の自由はより制限されることになる。読者は現在と過去については既知のものとして捉えるため, 歴史的事実に関わる様々な面で制約を受けることになるからである。一方, 前者の行き先である未来の有り様については, 未知の領域のためほぼ限りなく想像を膨らませることができる。その意味では, *A Connecticut Yankee* はその物語設定のために, 歴史的事実との整合性という課題に向き合うことを決定づけられたはずの作品であると言えるのではないだろうか。

しかしながら、実際には *A Connecticut Yankee* においては、現在から過去への時間移動に伴う制約をあまり受けない、いわば都合の良い結末を設定することにより、この課題への取り組みが回避されていると考えられるのである。つまり *A Connecticut Yankee* では、過去の出来事に変更を加え、その結果、変わってしまう架空の現在を描くという、読者の評価が分かると予想されるような結末は描かれなかった。作品と現実世界とのつながりを否定せず、かつその上で、作品世界のリアリティを重視するなら、ハンクの過去における決定的な痕跡を歴史から消し去るより他に方法はない。そして実際に、作品における「現在」において過去のハンクの行いを知る者はいないのである。もちろん、そもそもすべてがハンクの頭の中だけで繰り広げられた夢物語だった、という作品世界の捉え方も可能だ。しかしどちらにせよ、主人公の破滅とその存在の忘却で終わる幕引きは、避けがたい宿命的なものだったのである。

しかし、ここで一つ疑問が出てくる。ハンクは六世紀のイングランドにおいて、最も信頼を寄せる彼の「右腕」(CY 120)のクラレンスをはじめ、数人の部下を記者となるよう育て、新聞報道を担わせている(CY 121)。新聞は言うまでもなく、紙媒体であるから高い確率で後世に遺り得る歴史的証拠である。万が一、千三百年後に現物が一つも遺っていないとしても、新聞報道という文化形態そのものは人から人へ受け継がれるだろう。そうするとその歴史は遡れるわけだから、新聞の誕生に貢献し、数多くの逸話において中心人物として活躍したハンクの名は、歴史に遺っていて然るべきである。しかし、プロローグとエピローグにのみに登場する、十九世紀後半にハンクと出会ったというこの小説の語り手「私」、つまり作者であるトウェインは、六世紀のイングランドに新聞が存在したことにはまったく触れていない。言い換えれば、ハンクが中世に生きた証は、十九世紀後半には、少なくとも一般的に認識されるレベルでは、遺っていないのである。ハンクは、国家を形作る三つの要素は、特許局、学校、新聞にほかならないと述べるほど新聞の情報伝達力を重要視していた(CY 109)。電信や電話の通信網の導入と拡張にも精神的に取り組み、そのおかげで物語の中で命拾いをする場面も描かれて

いる。それほど大切にしていた情報伝達的手段にまつわることが、ものみごとに消し去られているという結末は、いったい何を意味するのであろうか。

『アメリカ報道史—ジャーナリストの視点から観た米国史』によると、一八七〇年代後半から一九〇〇年ごろにかけて、アメリカの新聞業界では新しい報道スタイルが広がり発展した (Emery 247)。それは、ニュース記事を重視し、質の良い読みやすい文体で大衆向けに書かれた、低価で地域に根ざした新聞をめざしたものだ。そうした動きについて、同書は次のように説明している。「1880年から1900年にかけて、客観報道の概念が発展し続けた。公正さを示すことは、読者層の増大を得、その結果、広告収入の増加を獲得しようとする新聞社主や編集長たちにとって、大切であった。(中略)より組織的で非個性的な記事スタイルが親しまれるようになった。」 (Emery 271)

トウェインは、一八六〇年代には、主にアメリカ極西部で記者や通信員として報道記事を書いていた。ハワイからカリフォルニアへ送られた通信文 (*Mark Twain's Letters from Hawaii*)、あるいは *The Innocents Abroad* (1869) や *Roughing It* (1872) に転載されたり、編集されたりして用いられた、かつて書いた記事や通信文の例を見ても分かるように、当時の大衆紙には、事実を伝えるニュース記事とともに、明らかに事実より大きめに話をふくらませた、いわゆるホークスと呼ばれる法螺話も掲載されていた。しかし、トウェインが作家稼業に専念するようになった一八七〇年代以降、客観的な事実に基づいてニュースを報じるという現代ジャーナリズムの常識となる報道スタイルが定着し始めたのである。実際「“客観的”な記事は、1865年から1874年までは全体の記事の3分の1だったのが、1885年から1894年になると2分の1に、1905年から1914年には3分の2に、そして1925年から1934年では80%に増えている」 (Emery 278) という。その発展の速度は緩やかなようだが、*A Connecticut Yankee* が出版された一八八九年には、客観報道の割合が三分の一から二分の一へ、そしてトウェイン晩年の一九〇〇年代には、その割合が逆転しているという事実は見逃がせない。新

聞記者から作家に転じた経歴を持つ者として、トウェインがそうした新聞報道の変化について認識していなかったと考えるのはむしろ不自然だろう。

トウェインが記者をしていた一八六〇年代の新聞と、*A Connecticut Yankee* が執筆された一八八〇年代当時の新聞では、明らかに内容が異なっていた。六十年代の新聞記事の価値は、まず第一に、面白さやインパクトの強さという点で測られる部分が多かった。正確な事実の記録とはほど遠いような記事が過半数を占めていた時代には、新聞の記事というものは、記録としての役割を担っておらず、その日その日で読まれては消えてゆくもの、と認識されていたのではないだろうか。*A Connecticut Yankee* において、ハンクが部下である司祭に新聞報道の指導の手始めとして書かせた報告文は、「お世辞や誇張」(CY 110) が混じったものであった。しかも、報告文自体はトウェインが独自に *A Connecticut Yankee* のために書いたものではなく、作品中の他の箇所でも何回か引用されている十五世紀の作家サー・トマス・マロリーの『アーサー王の死』の本文からほぼそのまま転載した文章である。ハンクは、その文章は未熟ではあるけれど、それはそれで時代のニーズに合ったものであり、初期の段階の出来としては悪くないと評価している。また、初めて発行された新聞 (CY 338-42) を読んだとき、ハンクは、見出しが予想を上まわる大仰な煽り文句になっており、文体がでたらめだったので、さすがに落胆の色を隠せないのだが、それでも初めて発行されたものにしては上出来だと、総評は肯定的である。ハンクが六世紀にタイムトリップしたのは一八七九年 (CY 36) で、その時彼は三十代前半の年齢である。一八六〇年代の報道スタイルはハンクにとってまだ馴染みのあるものだったと考えると、部下たちの新聞製作の技能の未熟さをこき下ろしはするものの、当時の条件下においては仕方がない、と寛大な姿勢を見せることにもある程度納得がいく。

何事も最初から上手くできるということは稀だ。しかし、ハンクという遠い未来の時代から来た人間が先導する科学や社会制度が途轍もなく急速に発展する社会環境にありながら、同じく彼が指導する新聞報道の有り様が数年経ってもほとんど変化していないとなると、話は別である。あの悲惨な結末

が間近に迫る物語の終盤、ハンクの一番の部下であるクラレンスはこう述べている。「新聞は、このところずっとよく読まれていました。教会の禁止令（インターディクト）は効き目がなく、野放し状態だったのです。戦争が続いている間は。そこで私は、従軍記者を両軍に送りこむことにしたんです。」(CY 536) 戦場はジャーナリズムの価値が問われる現場の一つである。十九世紀のアメリカにおいて、ジャーナリズムの新しい動きが加速したのは一八六〇年代の南北戦争を終えたあとの一八七〇年代だった。戦時中及び戦後における新聞報道の形式や内容の変化そしてその影響力については多くの議論が必至だが、少なくとも、「アメリカジャーナリズムにおいて最も優れた報道のいくつかは、この国家の試練の間、多くの特派員によって国民に提供された」(Emery 203) 事実を考慮すると、南北戦争が報道業界の発展の大きな原動力であったことは間違いない。それならば、六世紀のイングランドにおいても戦争の影響を反映した新しい報道スタイル⁷、つまり、客観的な記述の割合がより多い新聞が登場するのではと思いきや、さにあらずであった。ここでもまた、マロリーの『アーサー王の死』の本文をそのまま転載したものが記事にされていた。つまり記者の執筆能力は、数年前の、あるいは、ハンクの生まれた時代から遡ると五世紀も以前の時代の語りのレベルにそのまま留まっていることになる。それは取りも直さず、六世紀のイングランドで記者たちを指導、養成したハンク自身が、自分がタイムトリップをした一八七九年当時、つまり客観報道の割合が三分の一から二分の一へと増加しつつある時期の新聞報道の動向を把握しておらず、その業界の将来の様子についての展望も持ち合わせていなかったことを示しているように思われる。

もしハンクが、タイムトリップをする前にいた「現在」、つまり一八七九年の最新のジャーナリズムに敏感であったなら、南北戦争以降のアメリカにおいて急成長を遂げる経済と共に大きく発展しつつあった新聞報道を見本として、事実の記録として後世に遺す価値のある客観的な記事を書くことを推奨することができたのかもしれない。しかし、ハンクがもたらした新聞という文明の利器は、それが一八七〇年代以降の時代の変化を反映していなかつ

たために、彼自身や部下のクラレンスの名を伴って後の世に遺ることはなかった。六世紀にイングランドにもたらされたはずの新聞報道によるハンクの痕跡は、歴史的根拠が明確でないマロリーの物語の中に吸収され、その実存自体は忘れ去られてしまうよりほかなかったのである。

結 び

A Connecticut Yankee は、破滅的で後の時代に主人公の存在を示す明らかな証拠が遺らない結末を迎えるよりほかなかった。それは、この作品の主人公の人物像が十九世紀末当時のアメリカの国内外の情勢を映し出す鏡のごとく描かれていること、そして、「サイエンス・フィクション」という文学ジャンルが認知される以前の時代において読者の受容を意識すれば、「過去」の改変の影響が「現在」に見られるような成り行きにするわけにはいかなかったであろうことが要因と考えられる。さらに言えば、作家トウェインの職歴やハンクという人物の信条に思いを巡らすと、作中で重要な役割を担うことが期待されてしかるべき新聞報道のこの物語の中での有り様が、つまるところ、そうした結末を暗示するものであったとも考えられるのではないだろうか。

Notes

¹ ハンクの人物像や人格について、Judith Fetterley は“ambiguous” (460) と形容し、ハンクの“egotism” (463) を至るところで見ることができるとして、その未熟さを論じている。Richard S. Pressman は、ハンクの矛盾した人格と行動について、少なくともこれまで六名の批評家によって批判的に議論されてきた (473) とし、ハンクを「このヤンキーは、事実、自分が出会うあらゆる人間を見下している」(474)、「モーガンの横柄で情け容赦のない残忍な行いは、この作品のいたるところに見られる」(475) と述べ、その根本的な人格的欠陥を指摘している。

² *A Connecticut Yankee* をファンタジーと捉える批評家もいる (小谷 36 ; 渋谷 43-46 ; 筑後 64)。

³ 大井浩二はこの点について「テクノロジーに対するトウェインの不信、あるいは進歩の歴史という彼の信念の崩壊を主題にしている」と述べ、さらに「マーク・

トウェインは、革新主義的な歴史観、テクノロジー観に大きく傾いているかに見えながら、結局はそれを完全に否定することになった」（『金メッキ時代・再訪』156；171）としている。また、*A Connecticut Yankee* 執筆当時にトウェインがペイジ植字機への投資による破産の危機に陥っていた背景との関連を指摘する批評家もいる（Budd x；亀井422；辻43）。

⁴ 筑後勝彦は、ハンクは「帝国主義的な手法により覇権を握ろうとしたため、イングランドが内部崩壊してしまう」（64）と述べているが、大井がハンクを「都市化と産業化は人類を解放するための新しいフロンティアである、という主張の持ち主で」、彼自身は「西部フロンティアにおけるヒーロー、たとえばカウボーイやガンマンを彷彿させる」（『金メッキ時代・再訪』164-65）と述べているように、この構図をアメリカの国策としての西部フロンティアの開拓に擬えることもできよう。ただしその構図も、征服され土地を奪われたアメリカ先住民の側に立ってみれば、紛れもない植民地化政策であり、帝国主義にはかならないと言える。

⁵ トウェインは *A Connecticut Yankee* の出版から十一年後、大英帝国の領土を講演旅行で巡った体験を基にした旅行記 *Following the Equator* (1897) を発表した。その三年後の一九〇〇年に「私は反帝国主義者だ」と宣言し、翌一九〇一年には反帝国主義連盟の副会長の一人になることを快諾し亡くなるまで務めた（大井『米比戦争と共和国の運命』85）。反帝国主義の姿勢を示す著述としては、“To the Person Sitting in Darkness” (1901), “The War Prayer” (1902), “A Defense of General Funston” (1905), “King Leopold’s Soliloquy: A Defense of His Congo Rule” (1905) などがある。

⁶ Richard S. Pressman は、「モーガンは、民主主義や科学について語りはするが、実際に行っていることは、権威主義的であり、人々に恐怖と盲信をもたらしている。つまり、モーガンという人間は、根本的には、口では世の中を変えたいと言っている、本当にそうしたいとは思っていないようなのである。この人物の語る理論とその実践には、矛盾があるということだ」（475）と述べ、そもそもハンク・モーガンには、本心からの改革の意思などなかったという可能性を示唆している。

⁷ 本章では新聞報道における文章の形式と内容に着目したため、この点について触れていないが、ハンクのタイムトリップ先の六世紀イングランドにおいて従軍記事が初めて登場する第四十二章では、戦争写真（CY 534）も紹介されており、この写真のジャーナリズムへの導入を「新しい報道スタイル」の始まりと捉えることも可能である。実際、南北戦争の戦時下においては多くの報道写真家が活躍し、その戦争写真がアメリカジャーナリズムのさらなる発展に貢献した（Emery 211）。

Works Cited

Budd, Louis J. Afterword. *A Connecticut Yankee in King Arthur’s Court*, by Mark Twain, *The Oxford Mark Twain*, edited by Shelley Fisher Fishkin, Oxford

- UP, 1996, pp.i-xv.
- Chikugo, Katsuhiko (筑後勝彦). 「まぬけのウィルソンの成功の秘密－ハンク・モーガンと二人のデーヴィッド・ウィルソン」『マーク・トウェイン研究と批評』 vol.3, 2004, pp.63-71.
- Clute, John, and Peter Nicholls, editors. *The Encyclopedia of Science Fiction*. Orbit, 1999.
- Emery, Michael, Edwin Emery and Nancy L Roberts. 『アメリカ報道史－ジャーナリストの視点から観た米国史』大井眞二他訳, 松柏社, 2016.
- Fetterley, Judith. “Yankee Showman and Reformer: The Character of Mark Twain’s Hank Morgan.” *Mark Twain Critical Assessments Vol.3: Critical Essays*, edited by Stuart Hutchinson, Helm Information, 1993, pp.460-71. Originally published in *Texas Studies in Language and Literature*, XIV, Winter, 1973, pp.667-79.
- Kamei, Shunsuke (亀井俊介). 『マーク・トウェインの世界』南雲堂, 1995.
- Kotani, Mari (小谷真理). 「コネティカットの呪われた城－モリス, トウェイン, ウェルズ」『マーク・トウェイン研究と批評』 vol.3, 2004, pp.33-42.
- Nakagaki, Kotaro (中垣恒太郎). 『マーク・トウェインと近代国家アメリカ』音羽書房, 2012.
- Oi, Koji (大井浩二). 『米比戦争と共和主義の運命－トウェインとローズヴェルトと《シーザーの亡霊》』彩流社, 2017.
- . 『金メッキ時代・再訪－アメリカ小説と歴史的コンテクスト』開文社, 1988.
- Pressman, Richard S. “A Connecticut Yankee in Merlin’s Cave: The Role of Contradiction in Mark Twain’s Novel.” *Mark Twain Critical Assessments Vol.3: Critical Essays*, edited by Stuart Hutchinson, Helm Information, 1993, pp.472-86. Originally published in *American Literary Realism: 1870-1910*, XVI, Autumn, 1983, pp.58-72.
- Shibuya, Akira (渋谷章). 「ファンタジー作家としてのマーク・トウェイン」『マーク・トウェイン研究と批評』 vol.3, 2004, pp.43-53.
- Suto, Ayako (須藤彩子). 「一八八九年, ハンク・モーガンの文化戦争－『コネティカット・ヤンキー』の石鱈行商人と帝国主義」『マーク・トウェイン研究と批評』 vol.13, 2014, pp.75-83.
- Tsuji, Kazuhiko (辻和彦). 「双生の悪夢－マーク・トウェインと情報テクノロジー」『マーク・トウェイン研究と批評』 vol.1, 2002, pp.42-51.
- Twain, Mark. *A Connecticut Yankee in King Arthur’s Court*. 1889. *The Oxford Mark Twain*, edited by Shelley Fisher Fishkin, Oxford UP, 1996.
- . *Life on the Mississippi*. 1883. *The Oxford Mark Twain*, edited by Shelley

Fisher Fishkin, Oxford UP, 1996.

———. *Mark Twain's Letters from Hawaii*. Edited by A. Grove Day, U of Hawaii P, 1975.

———. *Roughing It. 1872. The Oxford Mark Twain*, edited by Shelley Fisher Fishkin, Oxford UP, 1996.